貴方が審査員
審査ハガキ付き

全国から応募総数
8495件

'98自治100周年
ひと・まち・ロマン
元気都市・京都

20 select
添付ハガキで投票、選ぶは元気大賞

京都市は今年自治100周年を迎えました。記念事業の一環として「あなたを元気にしてくれる京都の人、もの、事、場所」を募る「京都元気大賞」を募集しました。9月4日までの約3ヶ月間、ポスター・チラシによる告知、チンチンバスによる全国キャラバン、京都駅ビルでの「室町小路広場キャンペーン」、KBS京都、文化放送、静岡放送ラジオなどでの呼びかけ、等々によって全国47都道府県・海外6ヶ国から、総数8495点の応募をいただきました。本当にありがとうございました！　ほろりとするものあり、笑えるものあり、そうだと頷くものあり、選考委員一同たいへんな苦労の末にセレクトした優秀作20点はご覧のとおり。じっくり読んで、添付の投票ハガキで、あなたの「京都元気大賞」に一票を投じてください。投票いただいた方のなかから抽選で300名様に素敵なプレゼントを差し上げます。

優秀作20点の中から、皆さんの投票で、元気大賞を決定します！（大賞1件、特別賞3件）

主催 ■もっと元気に・京都　市民会議　　共催 ■京都市

応募締切　●平成10年11月30日（月）必着

問い合わせ先　●京都市総合企画局　プロジェクト推進室内
京都市自治100周年「京都元気大賞」事務局
TEL.075-222-3178

「京都元気大賞」発表
平成10年12月12日（土）13：30～（大市民会議・於：みやこめっせ）

京都元気大賞

私を元気にしてくれる京都、再発見

「ちょっと、そこのお二人さん記念に一枚撮りましょうか？　日本一の景色の嵐山でよい想い出になりますよ。どうですか!!」

「誰が写すの」
「そりゃ私ですがな、私が撮りますのや。この道四十年、腕は確かですえ。さあ撮りましょうか、ハッハッハッ」と大きく笑う顔のやさしいこと。《中略》おばあちゃんは足をひきずりながら大きすぎるカメラを移動させて嵐峡をバックにシャッターを切る。この瞬間はまさに仕事師。京都は洛西嵐山の「中之島公園」内で観光客を相手に写真師として働いている肝玉おばあちゃんこと「篠田キミエ」さんその人である。

彼女は今年八十二才、嵐峡のほとりに住んで七十余年。写真師だった夫と結婚し、三男三女を儲け、夫亡きあと写真師の仕事を引き継いで《中略》今日までの四十余年間嵐峡の四季を撮りつづけてきたのである。夫が元気だった頃には自分が写真師になるとは夢にも考えなかったことであった。わずかに夫を手伝っていたことを頼りに、写真技術のあれやこれやを独学で、子供達も一人一人と独立し、使いすてカメラの登場で大きな打撃をうけたけれど努力と気力でのりこえてきた篠田さんなのである。

レンズをのぞくようになってからは嵐峡の自然に一層の親しみが湧き一木一草にも暖かい心を向け、嵐山を訪れる観光客にも気持ちよく道案内をしたり、時には悩みごとの相談にのったりと、いつも笑顔を絶やさず、嵐山にこの人ありと誰れ知らぬ人のない位人気者のおばあちゃんなのです。

こんな篠田さんにあうと私にもまだまだ何でも出来るのだという錯覚をおこさせてくれる不思議なパワーを与えてくれるのです。努力と気力が信条の篠田さんにいつまでも健康を与えてくださいと神に祈る私です。

NO.1
京都元気大賞
橋本田鶴子（59）
京都市右京区
肝玉ばあちゃんのシャッターチャンス

総勢300名
投票いただいた方に抽選で差し上げます

キャンバス70・コンパクトカメラ1名
ゲームボーイカラー5名
万歩計10名
CD「京の旅人」（京都市自治100周年テーマ曲）
京都元気ガイド（平成11年3月発行予定）
発表は発送をもってかえさせていただきます

京に縁のある5人の選考委員の面々

その生業は違えど生粋の京男に京女、京都に魅せられ小説を紡いだスイス人。個性的な顔ぶれの選考委員に共通のキーワードは「京都への滋れる思い」

市田ひろみ
服飾研究家
「歴史と伝統の京都」というよりも、「自分にとっての大切な京都」という思いのあふれているものが嬉しかった。

井上章一
国際日本文化研究センター助教授
京都への思いがあふれているが、もうすこし、意表をついてくれるものもあればよかったかな？

北村陽次郎
京都経済同友会常任幹事
全国からの作品に、京都の外から見るからこそ鮮烈な「京都の風や温もり」を感じた。

デビット・ゾベティ
小説家
涙ぐむ話、大爆笑の話…素しい作品群に新鮮な驚き。すっきりしたものが多く、これはいま京都に吹く「新しい風」なのかも？

元橋一裕 CF編集長
思わず笑みが浮かぶような、京都の庶民的なよさが出ているほのぼのとした作品に出会えた。

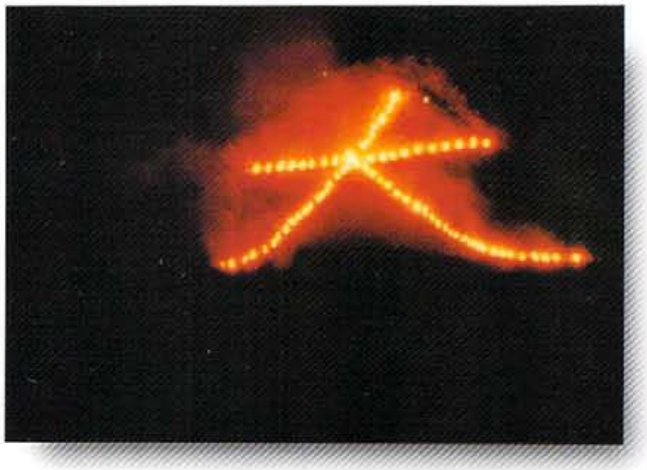
NO.2

京都元気倶楽部

井口今日子（27）
愛知県

大文字の送り火を見ていた時にとなりにいた人

火がつくまでの間がすごく長く感じられるのですが、火がついた時にパッと頭の中までひらめいた感じになって、明日もガンバロウと思っていたら、思わずとなりにいた人の手をにぎってしまった。



NO.3

京都元気倶楽部

佐藤郁代（39）
京都市左京区

賀茂川デ30分、道草ノススメ

私を元気にしてくれる京都…ズバリ賀茂川（鴨川）です。

20才の時京都にやってきた私は、あと半年くらいで京都に住みついて20才を迎えようとしています。《中略》独身の時は、鴨川まで歩いてすぐ行ける岡崎のアパートを選びました。仕事に行き詰った時、失恋した時…鴨川のせせらぎを眺めていると元気がわいてきました。

結婚して洛北の果て市原に嫁いできて、なんとなく家に帰るのがイヤだった時、仕事帰りに思い切ってバイクで遠回りして、昔みたいに賀茂川でボ～っとしていると、《中略》ジョギングしている人が実に気持ちよさそうにイキイキと走っているのに感動し、自分はなんてムダな時間を過ごしているんだろう…と妙に情けなくなって、「そうだ!! 私も走ってみよう!!」と次の日から走る決心をしたのです。《中略》

自分でもたぶん1週間ももたないと思っていたのに、もうかれこれ10カ月にもなります。仕事が終わってアフター4の30分間、最初のうちは西賀茂橋から御園橋間をフーフーいいながら往復していた私は、通学橋（賀茂川の上の河川敷の道がとだえる所）から北山大橋までの往復をラクラクこなせるようになりました。走っている時は、《中略》イヤな悩みやストレスは不思議なくらいフッ飛んで気分がス～っとします。《中略》何よりも、四季折々の賀茂川の自然の美しさの中で汗を流せる、というのは最高の贅沢だと思います。賀茂川をそよぐ風、水の流れ、緑の木々、小鳥たち、そこを行きかうさまざまな人々などを眺めていると、京都に住んでて本当によかったな～としみじみ感じます。

これからもこのすばらしい自然がいつまでもそのままで、人々の心を癒してくれる、そんな京都でいてほしいと心から願います。

NO.4

京都元気倶楽部

木村直裕（40）
千葉県

京都 寿寺伝説
（きょうと　ことぶきでら　でんせつ）

《前略》法然院の「白砂壇」は「枯山水」の一種で、ふだんは波線模様や水紋模様を基調とするデザイン。しかし、年に一度だけ、年末になると、正月にふさわしい文字が描かれることがある。私がそれを発見したのは昨年（97年）暮れのことだった。

この日、英伸（えいしん）和尚が「白砂壇」の上で悩んでおられた。「模様か、絵か、文字か、元日用に考えているのです。来年はトラ年ですから、トラの絵柄も考えたんですが、仏教的に適切ではなく…」と。和尚の悩みは妙にややこしいものであった。

英伸和尚は「ことぶき」という漢字一字を選ばれた。《中略》しかし、「寿」「壽」など、どの漢字にすべきか、それが和尚の次なる悩みになった。英伸和尚が選んだのは写真の「ことぶき」だったのだが、《中略》更なる悩みは「書体」。和尚は砂壇から離れ、石段を駆け上がって、腕を組んで砂壇を見下ろされた。《中略》英伸和尚の決断はガッシリとした書体に落ち着いた。《中略》

和尚の「ことぶき」が完成に近ついた時、一組のカップルが門をくぐって石段に現れた。そして二人で幸せを予感するように砂壇の「ことぶき」をじっと見つめたのである。辺りが急にほんわかした雰囲気になったので、私はお二人さんの邪魔をせぬように、そっと石段上段の片隅に移動した。写真の画題は「寿寺伝説（ことぶきでら　でんせつ）」という。「寿寺」とは私が勝手に名付けた法然院の別名である。京都のどこかに「寿寺」があり、年に一度、その砂壇に「ことぶき」の文字が現れる。その日、その時間、その場所に居合わせた恋人たちは必ず幸せになれるという、そんな「伝説」という意味である。

《中略》乾砂に水紋あり。ドライであるはずの砂に潤いが表現されている。日本人も外人さんも、老いも若きも、団体さんもカップルも、そんな白砂壇に息を飲む。ストレス社会に生きる人々が煩悩から解放され、乾いた心がほんのり潤う素敵な瞬間である。

京都元気大賞

見覚えのある風景

NO.5 京都元気大賞
上田節男（54）
東京都

年老いた父と旅した京都の街には、雪虫がふるふると舞っていた。

夕食の席でビールを注ぐと父は嬉々とした目付きになり、まるで宝物に触れるようにして、震える手をそろそろとグラスに伸ばした。それは、アルツハイマー症と診断された父が、久しぶりに見せてくれた至福の表情であった。《中略》「吉田山に行ってみようか」と父を誘い、だらだらと歩いて吉田山の学生街まで来ると、父はまるで知っている街を歩くかのように、ひょこひょこと私の前を歩き出した。《中略》その父の後を歩いていた私の足が突然止まった。そのあたりの風景に見覚えがあるような気がしたからだった。「ちょっと、この風景を見てよ。どこか見覚えがないかい？」と訊くと、父は「さあねぇ？」と首を傾げた。私はコンパクトカメラを取り出して父の姿を写し撮った。《中略》その風景は確かに我が家のアルバムに眠っている古い写真の風景だった。《中略》その黄ばんだ写真と、いま目の前にある風景のピントが合った瞬間、母の言葉が蘇ってきた。「京都で撮ったのよ。父さんが撮ってくれたの。まだ、父さんと結婚する前だったわねぇ…」だが、現実の父はその《風景》に何の感興も示さなかった。

旅館に帰ると、兄から電話が入った。《中略》「吉田山あたりの風景を見つめる父さんの目の中で、風が血を流しているように見えたよ」と私が言うと、「京都とはそんなところだよなぁ。京都という街は、そこに住んだことがある人にも、初めて訪れた人にもやすらぎを分けてくれるんだよなぁ…」。確かに京都の街は、だれの心にも「見覚えのある風景」に思えてくるから、自分の「ふるさと」に抱かれた気持ちになってくる。その懐かしさや嬉しさが重なり合って、みんなが「元気」を取り戻していくことになる。そこに住む人、そこを訪れる人、一人ひとりの元気の源である「見覚えのある風景」を、いつまでも大切に残してほしいものです。

私を勇気づけてくれた京都のタクシー運転手に

NO.7 京都元気大賞
堀田雅司（41）
愛知県

今からもう二十年以上前のことだが、私は京都の大学を受験するため、クラスメートと五条のホテルに宿をとった。翌日、一台のタクシーを呼んでもらい四人全員が乗り込み、受験会場へ向かった。私を含めた四人は受験日は一緒だったものの、受ける大学も学部も違っていたので、受験会場がばらばらだった。タクシーの運転手に四つの場所を告げると、向かう順番を私たちに説明して車を走らせた。

タクシーが会場に着くと一人下車をする。次の会場に着くとまた一人降りる。そのたびに、「頑張れよ。絶対受かるから」と励まして送り出す。タクシーの中は次第にスペースが多くなり、その空間は留まっているものにとっては置いてきぼりを食ったような孤独感と寂寞感でいっぱいである。

三人目の友達が降りて車の中は私と運転手一人になった。途中私たちの会話に口をはさむことはいっさいなかった運転手だったけれど、私の受験場が近づくとおもむろに口を開き、「あんた、みんなに頑張れ頑張れいうて、あんたは誰にも言うてもらわれへんなぁ。そやからわしが代わりに言うてやるわな」と気恥ずかしそうな笑みを浮かべながら、「頑張りや、きっと受かるで」と言ってくれた。

あの一言が心細かった私にどれほど勇気を与えてくれたことか。

京都は学生の街、観光の街である。遠来の人が多く訪れる。受験当日の私のようなものもいれば、沈んだ気持ちを洗い流すために訪れる人もいるだろう。京都のタクシーの運転手はそういった人々と触れあう機会が多い。私は自身の感謝を含めて、この人たちに元気大賞を送り、出会う人々に元気を与えてやっていただきたい。

「京都町内会バンド」です！

NO.6 京都元気大賞
島田伊津子（36）
大阪府

レズビアンであることを公表し、身の丈で自分らしく生きる笹野みちるさんが、大学時代の友人で、京都の高校で先生をしておられる原田さんと他2人の計4人のメンバーでやっておられるバンドです。右肩上がりの売れる生き方を捨て、京都に戻って、京都にこだわり音楽活動をする心意気がバンドの名前にも表われていると思います。今の自分に自信を持って自分自身を好きになり、等身大の自分を認めてくれる仲間を増やしていくことの大切さを彼女の生き方から学びました。100の人権尊重の言葉より、彼女の生き方と彼女を認めていく社会が他のマイノリティの存在を考える機会となりました。一度会ってみて下さい。すごく魅力的な人です。一度、彼らの音楽を聴いてみて下さい。すごく優しいメロディと茶目っ気たっぷりの世界が味わえます。

NO.8

京都元気大賞

安川利子（35）

千葉県

京のお風呂屋さん

～心も体もほっとできる魅惑のコミュニティースペース～

私は京都の銭湯かとっても元気なので気に入っています。《中略》

私と京都の銭湯との出会いは結婚がきっかけでした。私の主人は京都出身、しかも銭湯好き。京都の実家へ行くたびに、いろいろな銭湯に連れていかれるのです。

例えば、伝統的な木造建築、歴史の重みを湯船で感じることができる錦市場近くの『錦湯』さん、脱衣場で真っ赤なお鼻が印象的な天狗様を眺めて、女神の石像と露天風呂を楽しめる驚きの老舗銭湯『船岡温泉』さん、エレベーターで1階から3階までが移動可能というお年寄りにも優しい近代的コミュニティー銭湯『正面湯』さん、そして、家族のように親しく番台から声をかけてくださる実家近くの『三福湯』さん。

これはほんの序の口。私なりの「京都銭湯マップ」を主人と一緒にいつかは完成させたいと思っている次第です。

チャンスがあるたびに、いろいろなお風呂屋さんに足を伸ばし、地元の人達に混じってお湯を楽しんでいます。320円で極楽気分を味わえる京都のお風呂屋さん！

伝統と創生という京都市のモットーにふさわしく、それぞれの銭湯がその歴史や個性を生かしつつ、近代化への挑戦をも阻まない…そのスタンスがとてもすばらしいと思います。

経営される点では、ご苦労も多いかと思いますが、地元の方々の厚い支援にも期待して、今後ますます地域交流の重要な拠点としても、お風呂屋さんが機能してくれることを望みます。地域のコミュニティースペースとして、行政サイドからの支援もあればなと感じます。

また、観光客の人にとっても、京都の人達や生活を文字通り肌でふれることのできる銭湯体験は貴重ではないでしょうか。よりいっそう京都の銭湯が元気になって、いつまでも私を温かく迎えてくれることを願ってやみません。

NO.9

京都元気大賞

藤吉里美（31）

岐阜県

パワフルな「京野菜」

京野菜というものがあるのは知っていたけど、今年、31歳にして初めておめにかかりました。

宅急便で届いたお中元です。中にはビックリする程大きくて、重くて、まん丸の賀茂なす、ピーマンより大きなツヤツヤの万願寺ししとう。子供達もいつもと様子が違う野菜達を前にキャーキャー言いながらいろんな角度から観察をしています。

京野菜というのはもっと繊細なイメージがあり、こんなにパワフルな物だと思ってもみなかったです。パワフルでいて、とても姿がかわいい… 子供じゃなくてもつい全部取り出して列べてしまいました。

双子の息子達はいつもだと野菜を残して食べません。なぜかこの日から「なす、スキ」とへんしんしてしまいました。ビックリです。

京都と言えばお寺…というイメージがとても強いのですが、今は落ち着いて行けそうにもないです。そんな事から私のとっておきの京都は京都で産れた野菜達です。

私は趣味でネクタイの図案を書いています。この時の事がどうしても忘れられず、京野菜のパワーと、この時の子供達の笑顔を記念してネクタイを作ってみました。これでパパも元気に仕事に行ってます！

NO.10

京都元気大賞

J.A.T.D.にしゃ会（29）

京都市伏見区

三条大橋

1987年10月15日。それはスリランカから日本に来て初めての単独行動だった。京阪三条駅でおりた僕は、三条大橋を渡ってまっすぐ行ったところにある、日本語学校に向かっていた。

雨が降っていたことを鮮明に覚えている。ほとんどの人は傘をさし、すごく足早だった。みんな無関心にごく日常的に、三条大橋を通り過ぎていく。追い越されながら僕は、例えようのない喜びをかみしめていた。夢にまで見た日本に、いま現実に僕は一人で立っている。《中略》それは、全身にしびれが走るような瞬間だった。一歩ずつ大切にゆっくりと歩いた。今思えばあの時が、これから日本で自分なりに歩いていく、はじめの一歩だった。一歩踏み出す時の不安や希望、抱えきれない思いを胸に、僕は現実の三条大橋を学校へ向かって歩いていった。

学校の帰りはいつもフィリピン人のリン君と一緒だった。二人で毎日のように新京極の店をのぞいたり、本屋で立ち読みしたりした。そして、三条大橋を渡ったところで別れるのだが、彼はいつも「Take care of yourself（気を付けるんだよ）」と言ってくれた。一番不安だった時期に言ってくれたその言葉は、不思議なくらい僕のなかにしみ込んでくるようで、すごく嬉しかった。今でもピンチの時に思い出して自分で言ってみると元気が出てくる。

あの頃からはや11年。これまで何度この橋を渡っただろうか。比叡山を見ながらゆっくりと歩いた日。夕立に追いかけられて走った日。立ち止まって、元気に遊んでいるユリカモメを眺めた日。僕はこの橋を渡るたび、初めて渡った10月15日を想い出す。

これからも、不安だったり迷ったりすることがあるに違いない。でも僕はあの日の三条大橋を思い出して、一歩踏み出して行こうと思っている。

京都元気大賞

NO.11

京都元気大賞

坂本至（46）

千葉県

私の京都

《前略》教員になってから2校目の生徒の修学旅行で、京都へ行ったときのことでした。《中略》その日も、「なんとかという寺」の見学ということで、クラスの生徒の一番後ろから入って行きました。《中略》と、バアーンと、飛び込んで来た仏像があったのです。《中略》この時期は、生徒の事だけでなく、父親の調子がすぐれなかったのに、実家から離れた新設校を希望して転勤した事（父親は次の年、他界しました）、結婚の事、部活の事…と、精神的に、かなり減入っていた時期でした。「そんな私を見透かして、静かに微笑んでいる…」《中略》仏像からそんなショックを受けるなんて、全く思ってもいませんでした。そのきゃしゃな身体から、「全てを超越したうえでの、明るさ、かろやかさ」が、私に語りかけるように、しかし強烈なメッセージとして伝わってくるのです。完全に圧倒されました。遥かに、時代を超えて、今現在の私の心を揺り動かすものが、現実に、目の前にあるのです。《中略》あわてて、仏像の名前を見て「ミロクボサツだな。ここはコウリュウジ、コウリュウジノミロクボサツ…」と、忘れないよう繰り返しながら、生徒の後を追いました。

このことがあってから、「京都」という街がとても身近に感じられるようになりました。今年、職場の若い女性に「夏休み、京都に行くので、どこかおすすめの所がありますか」と、聞かれたので、迷わず「広隆寺の弥勒菩薩」と、答えました。後日、「本当に良かった。友達と二人、弥勒菩薩の前で、二十分位ボーッとしてしまいました」と言われ、二廻り程も年が離れた若い人とも、気持ちを通じ合えることもあるんだな、と、うれしくなりました。まだ、私にとっては弥勒菩薩だけと言って良いような京都ですが、他にも素晴らしいものがあるかもしれないと、思えるようになってきました。やはり京都は「世界遺産の都市」との感を深くする、今日この頃です。

NO.12

京都元気大賞

西沢江美子（58）

埼玉県

「縁」を教えてくれる菊野大明神

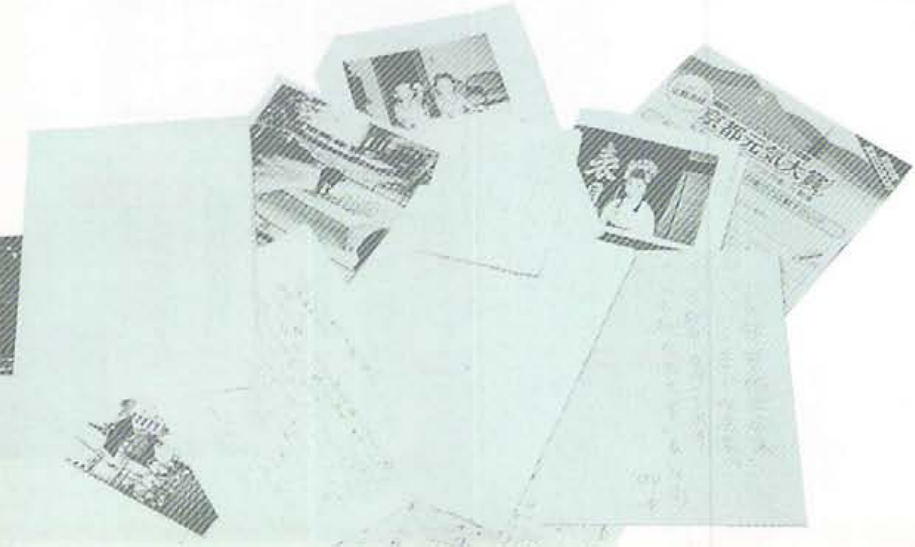
落ち込んだら、とにかく新幹線にとび乗る。借金して行ったこともある。行き先は京都河原町通。《中略》河原町通にある菊野大明神に会うためだ。

菊野大明神を「お菊さん」と呼んで、京都通いを始めて二十五年になる。出会いは全く奇妙なことからだった。ある二月の寒い日のこと。友人からの電話で《中略》ひとりの女性がやってきた。《中略》それが福田さんだった。彼女が語った話とは、夫の女性問題である。《中略》「京都にいい縁切り寺があるんですって。ひとりでとてもいけないので、一緒にいってほしいのです」

思いがけないなり行きに、根っからのヤジ馬根性が京都行きを決めていた。《中略》

法雲寺は小さなやさしい寺だった。その寺の右手に木戸があり、温かい灯がついている。私たちは勇気を出して、木戸を開けた。「こんばんは」「いらっしゃい。どうしはった」小さなおばあさんがひばちを抱えて待っていた。「裏に「お菊さん」がいるから、気持ちを全部出しておいで」とローソクと線香を渡してくれた。菊野大明神のお堂に入ったら、縁切りの絵馬が奉納され、囲い板には「○○と別れられますように」と書かれた紙や写真、ハサミなどがびっちりはりつけてある。女の怨念がこもっているような異様な空気だ。

その夜、二人は近くのホテルに泊り語り合った。彼女は、あんなにも感情的に見ていたことを冷静にみている。何よりも私自身が、ひとりの女が生ききっていくことのすばらしさを、自分のこととして話していた。何度か通うちに、「お菊さん」が自分を素直に見つめられる場所になっていることを知らされた。時代を反映して菊野大明神のお堂には女や男の別れを願う文ばかりでなく、兄弟、親子、職場の上司に至るまで、様々な縁切りを願う文がふえている。情の薄くなった世の中で「縁」とはいったい何なのか考えながら、お堂に足を運び元気づけられる。《中略》「縁切り寺」のお菊さんが「縁とは」を問いかけている。《後略》



京都元気大賞

京都大好き

NO.13

京都元気大賞

菊地友美（22）

栃木県

私を元気にしてくれる京都は、3つあります。

♪タララ～タララ～タララ～タララララ～♪『そうだ京都へ行こう。』という長塚さんのナレーションのCMです。あのCMを観ると、中学時代の修学旅行を思い出します。修学旅行2日目、朝から雨。その日は待ちに待った自由行動の日でした。この日のために前から計画を立ててきたのに、私の計画は音をたてて崩れていきました。道はわからなくなるし、時間がたつにつれ雨は激しさをますばかりだし（ああ、つまんないなぁ。制服は濡れるし、はやく帰りたい！）と思いながら、おばさんに道を尋ねてみました。そのおばさんは、京都弁で優しく教えてくれました。あの時のなにげない優しさがとっても嬉しかったです。その、おばさんの顔が仏様とはおおげさですが、輝いて見えました。その後から、ちょっとした奇跡が起こりました。金閣寺に着いたそのとたん、雨が嘘のように上がり、『どうだ。金閣寺だ。』といわんばかりに、金色に輝き建っていました。あの光景は、はっきりと頭に焼き付いています。そのことを思い出すと、中学時代に戻れ、あの時のおばさんや、歴史重い京の都を思い出すと、結婚し、毎日忙しなく生活している私が、何か忘れてしまった物を思い出させてくれるような、穏やかな優しい気持ちになれ元気がでます。私にとって、あのCM、道を教えてくれたおばさん、金閣寺この3つが元気にしてくれるものです。

NO.14

京都元気大賞

泉洋子（50）

福井県

ありがとう京都

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色…」平家物語にうたわれている沙羅双樹の花に初めて出会ったのは40才の時です。福井市の大安禅寺にその木はありました。白いはかない命の花になぜかすごい感動を覚えたのです。このお寺の本山が京都の妙心寺と云うこともこの時に知り、そしてこの妙心寺にも沙羅双樹の木があることも知りました。今まで花を見てこんなに感動したことがあったでしょうか。《中略》妙心寺には6月から7月にかけて「沙羅を愛でる会」があることも後日知りました。《中略》それでまず行く為に積立貯金をすることにしたのです。主婦のこづかいから捻出できるようにと、月々1000円を積立することになりました。そして40代最後の年に行けたらいいねと云うことになったのです。毎月毎月1000円を積立しました。《中略》

そしてとうとう40代最後の年がやって来たのです。それだけ年を重ねて来たのですから、念願の京都へ行こう！　妙心寺へ行こう！沙羅の花に会いに行こう！《中略》旅費はオッケー。小使いもオッケー。子育ても楽になりました。さあいよいよ私達女三人の日帰り京都旅の出発です。あこがれの京都…。そして妙心寺の東林院へ。沙羅双樹の花は私達を待っていてくれました。木の下には今朝咲いたばかりの花がはかなく落ちていました。夢にまで見た妙心寺の沙羅の花が今ここに…。沙羅を愛でながらの一服のお茶。なんとおいしかったことでしょう。《中略》しばらくは只無言でその場に酔いしれていました。もう満足です。明日から又がんばって働きましょう。元気いっぱい心の中に積めこんで京都をあとにしました。

1000円の積立はまだ続けています。いつか又京都へ行きたいと思ってます。今度は50代最後の年になるかも知れません。その時はせめて1泊くらいしたいですね。それまで元気元気で働こうと思っています。ありがとう京都！　元気で京都！又いつか京都へ行こう―。

NO.15

京都元気大賞

櫛間智美（21）

宮崎県

人力車のお兄さん

私は京都に来たら、嵐山の人力車にのるんですが、その中でも、かなりイケている人がいて、もう乗っている間、説明もちゃーんときいていたのですがもうその人のことで頭がいっぱい。今は、仕事の都合で行けないけど、もう一度あの人に会いたいな。と思って、この前久しぶりに行って又、人力車にのろうと思ったら、一歩手前で他の女のお客さんにとられて姉と2人であーとおもわずさけんでしまったのでした。でも他にもいろいろと京都ならではの町並みは好きです。

とにかく京都のふんいきは好きですね。人もいい人ばかりです。ぜったい問いかけると笑顔で答えてくれるのでサイコーです。料理もうまい。修学旅行で京都の寺まいりしたのですが、もうお寺の人もサイコーにおもしろい。

今は宮崎に帰ってきちゃったけど、いつかは、京都に住みついちゃいたいと思う私でした。

このままの京都でいて下さいね。

NO.16

京都元気大使

山田仁美（22）

愛媛県

Time will tell ～時がたてばわかる～

晩秋の夕暮れの「糺の森」。下鴨神社の本殿へと続く長い参道。《中略》ただ無心のままに歩くこと、それは私にとって至福の時間だ。嫌なことも不安なことも、そして期待感なんてものまで、何ひとつ考えなくていい快さ。京都で出会えたその空気は、想像もつかない程の沢山の人達を見守り、迎え、くぐり抜けさせてきたその大きさそのものだ。ふと「歴史」という言葉が浮かんだ。教室で聞くとそれはあまりにも遠い世界のものだったのに。《中略》「作ろう」としてきたのではなく、何度もぐらついたり揺れたりしながらも、歴史として成り立ってきた。そんな時間の重みを京都は教えてくれる。

昔の生活の中にも「下鴨」があった。何世紀を隔てても共通項が見つかるって、すごい。過去との繋がりというバックアップが、昔の人もそこに佇み落ち葉の上を歩き季節の流れを見ていたという、その真実味と確信を決定づけさせる。培われた歴史の偉大さ。その中に未来への繋がりのヒントも一杯隠されているはず。それが歴史の重みなんだと気づく。そして私もその一部であることも。そんな町を歩いている。《中略》こころが無意識に、敏感に働いて。こんな刺激的な町、ほかにないよ。…なんてこと、未来の人も思ってくれますように。この気持ちがずっと紡がれ続けますように。下鴨の神様に祈った。

いつも、そんな気持ちで帰途に就く。今度はいつ来れるかな、なんて未来を思う余裕が現れる。そのころにはもう、空っぽだった私の心に「元気」が積もってる。

きっとこの町のいろんな場所で、いろんな人たちが「元気」をもらってるんだろうな。それだけ京都は「元気」が充満してる町なんだろうな。…というよりも、京都は「元気」になろうとする意欲を起こさせてくれる町なのかもしれないなと思う。《中略》こころが無意識に、敏感に働いて。こんな刺激的な町、ほかにないよ。

NO.17

京都元気大使

奥村阿喜子（41）

京都市下京区

元気おおきに

私のとっておきの京都はあまりにも有名な先斗町です。《中略》私や私の家族に大きな元気をくださった一人の女性のお店があったからです。《中略》お名前は長門由利子さん。先斗町の元芸妓はんです。おでんや一品のお店をされていました。

私との出逢いは24年くらい前。フォークグループの公開録画を見に行った時、《中略》お店のマッチを下さいました。マッチには先斗町／鳩とありましたが、高校生の私にこんなマッチ配ってどうしはるんやろーなんて思い、先斗町通いしていた父親の名を言いました。そうすると長門さんが「ようよう知ってまっせー!! 長いこと逢うてまへんけどお元気にしといやすかー?! 海軍へ出兵しはるときおくりに行かしてもらいましたんどすエー」と返事が返ってきました。その日以来、父は再会、私や私の家族とのお付き合いがはじまりました。

長門さんの命はエルビス・プレスリーでした。《中略》プレスリーを「ブーさん！ブーさん！」と呼び、長門さんのユニークな生き方がだんだん評判をよび、とうとうTVの特番まで企画され、堂々プレスリーのお宅の前で着物姿で「ブーさーん!!」と走りまわられました。その後グランドキャニオンの岩の頂上へヘリコプターで降ろされ、その頂上で湯豆腐をおなべでつくられ、ほんとうにすごい事をされた元気の源みたいな女性なのです。

そんな長門さんもプレスリーが亡くなられる一年前にあの世に旅発たれました。亡くなられる1ヶ月前に母親と私でお見舞いに行った時も髪をきれいに三つ編みされお化粧されベッドの上に正座され、カルシウムをとらないとと、スルメを食べてらっしゃるのです。あの気には本当におどろきました。《中略》元気印の我が道を強く魅力的に目いっぱい燃焼尽くされた長門さんは本当にいろんな元気をくださいました。こんな想い出もあり、長門さんを通して先斗町が大好きでこれからも、ずーっとずーっと歩きたいとっておきスポットです。

NO.18

京都元気大使

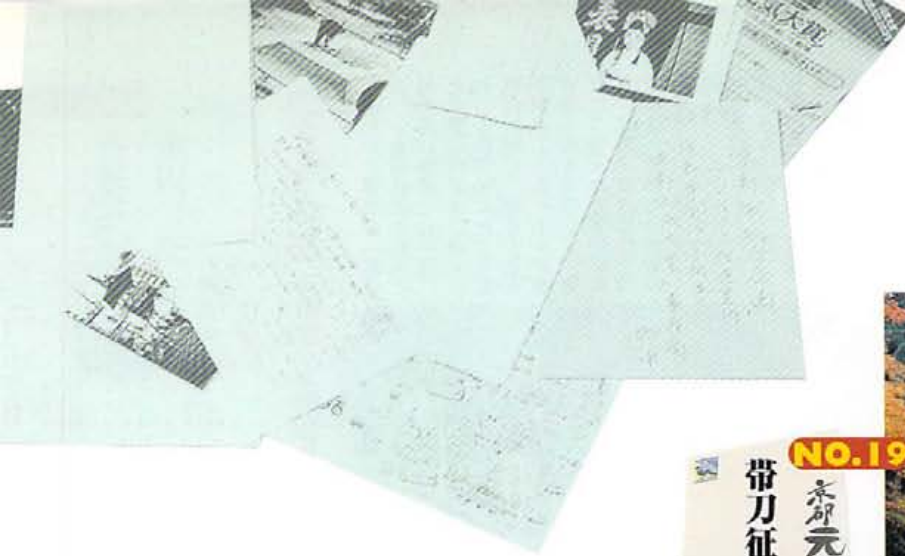
花澤智之（21）

埼玉県

パワーの源「京都駅」

今までの「駅」のイメージを越えた新しいタイプの駅ビルだからである。今までの「駅」とは電車に乗降する場所ということが主な顔で利用客がここにとどまる時間は「くわずか。改札を出てしまえばあとは目的地へ向いそして帰りまでは駅に来ることはほとんどない。帰宅後、だれかに「あそこの駅はどんな建物だった?」ときかれてもほとんど記憶にないという駅が大半だった。しかし、新しい京都駅ビルは違う。右記とは対照的である。市内観光の途中で少し寄ってショッピングや散歩をしたくなる場所の一つであり、そして思い出に残る駅である。

さて、元気にしてくれる最大のポイントだが、それは巨大建造物だということである。人は巨大なものを好み、大きなものを見るとそのものが持っている力のようなものに吸い寄せられ元気が出る。私は京都駅に着くと、三時間近く車内にいた為、疲れをおぼえながら新幹線ホームから烏丸口へ向う。しかしその疲れも駅ビルに入った途端その巨大さ、新鮮さなどによって吹っ飛んでしまう。この建物全体で「京都」を表現していると思う。関東生まれ関東育ちの私が京都に惚れている理由が三つある。その三つがここに凝縮されている。三つの理由とは①市内のあちらこちらに見られる明治、大正時代の建築物に代表される新しいものが好きということ。②無駄が無いと言うこと。③他の真似をされないということである。駅の各所を例えに挙げると駅に劇場が設けられている。どの機能も必要なものばかりで不必要なものはない。そして澄んだ青空を見ることが出来るという点である。これらは京都だからこそ実現出来たのだと思う。私はここへ来ると京都人のエネルギーを感じ、それらを元気の源として吸収し、京都の町へ吸い込まれる。



京都元気大賞

NO.19

京都元気大賞

帯刀征夫（54）
神奈川県

元気の根源、三千院

「そうだ京都行こう」のCMも流されていない二昔も三昔も前、仕事で悩んだ時や何かで心が綻びた時、「そうだ、京都へ行ってみよう」と、何はさて置き京都へと旅発ったものだ。人にはそれぞれ気分転換の方法があると思うが、私の場合は、京都の、それも星霜にいぶされた風韻のあるお寺の庭を、ただぼんやりと眺めることが気分転換になった。気持をリフレッシュできた。元気がとり戻せた。

京都に出かけると必ず立ち寄るお寺がある。洛外の大原にある三千院だ。いつも朝一番に行った。拝観料を払い、すぐに宸殿に行く。端っこに座り、僧侶たちの読経を聞いているだけで、信仰心に欠ける私も、だんだんと心が落ち着いてきた。その読経には抑揚があった。まるで歌っているようにも聞こえた。後年解ったことだが、それが「声明」と云われるものだった。声明を聞いていると無心になれた。その後宸殿の回廊に端座し、苔むした庭と、その向こうに見える往生極楽院の、ものさびた建物をぼんやりと眺めるのが、いつとはなしに私の習いになっていた。そのひとときは雑念などみじんも無かった。あれほど悩んでいたのに、あんなに落ち込んでいたのに、不思議なことにそれらが払拭され、入替りに元気の「気」が心を充足していったものだ。

従って、私の元気の根源は京都だ。それも大原の三千院だ。あの寂莫として凛とした風景の前では、人ひとりの悩みなど無に等しい、と素直にそう思えた。また何かで悩んだ時は「京都に行こう」と思う。元気をとり戻しに、心をまっさらにしに…。

NO.20

京都元気大賞

小原玲子（32）
神奈川県

憧れの昔の女性になれるとき

私は京都が大好き。学生と社会人と計七年間住んだ大阪の思い出より、休日の度に出かけた京都の方がずっと強く心の中に残っている。《中略》

私は山陰の田舎で育ち、祖母と一緒に時代劇を見ることが好きな子供でした。その影響で、着物と日本髪に強い憧れを持っていました。生家も古く明治建築の元商家であり、古い調度品にも囲まれていたので、時代劇の世界は私にとって居心地の良い空間でした。

中学二年生の時の修学旅行で初めて京阪神へ行った時、私の心を強くとらえて離さなかったのは、東映の映画村の撮影所だったのです。テレビではなく、目の前を動く日本髪姿の女の人に、私はいても立ってもいられない気持になってしまいました。聞けば有料で体験できるとのこと、しかし私は限られた時間しかない修学旅行中の身であり、当時の私にはとても高額でもあったので、いつか大人になったら訪れようと心に誓って帰ったのです。

それからちょうど十年、あまり興味を示さない姉を説得し、二人で映画村を訪れ、変身の初体験をしたのでした。この日の感激は一生忘れることができません。貴重な体験に、姉はすっかり魅せられてしまい、私は感謝されたのでした。それをきっかけに、西陣織会館での十二単、帯祭りのオーディションを受け江戸時代の姫君の役など次々に幸運に恵れ、子供の頃の夢をたくさん叶えることができました。もちろん姉も一緒にです。

そして《中略》今年、京都市内のあるイベントのプレゼントに当り、久しぶりに又舞妓さんの姿の写真を撮ってもらう機会に恵れたのです。変身することによって違う自分に出会い元気になり、そして又、時々写真を見ては元気をもらっています。

私の好きな京都とは、幼い頃から憧れだった、昔の女の人に一瞬だけど変身できる場所、そしてそれがもっとも似合う土地なのです。